

ディスポーザー調査報告会を開催

<21世紀水倶楽部>

歌登町の社会実験をリアルに報告

NPO法人21世紀水倶楽部（大迫健一理事長）は平成17年12月7日、東京・千代田区の砂防会館別館において「ディスポーザーに関する調査報告会」を開催した。

この報告会は、下水道施設へのディスポーザー導入に対する基本的な考え方について、国土交通省が17年7月に『ディスポーザー導入時の影響判定の考え方』として公表したのを受けて開催されたもので、関東近県の自治体職員をはじめとして、定員約50名のところ70名を上回る聴講者が参加した。

報告会ではまず、21世紀水倶楽部の奥井英夫監事が、開会の挨拶とともに、昭和30年頃からの、わが国におけるディスポーザー導入検討の経緯について概略を述べた後、北海道歌登町で実施されたディスポーザー導入の社会実験について、実際に実験を行った立場から、国土技術政策総合研究所下水道研究室研究官（農学博士）の吉田綾子氏が「ディスポーザー導入による下水道施設への影響（ディスポーザー排水原単位・管渠への影響）」をテーマとして講演した。

歌登町の社会実験は、年々高齢化し過疎化する歌登町においては、冬場はごみ集積場への積雪が著しく、高齢者がごみ出しに苦慮している現状を踏まえて福祉の一環として、平成12年から5年間にわたって実施されたものだが、講演ではこの社会実験について、①ディスポーザーの使用実態、②ディスポーザー排水の負荷原単位、③管渠への影響——について報告された。

それによると水道使用量は、対象となった一般家庭でも、また町唯一の町営ホテルにおいてもほとんど変化はなく、水質負荷はSSで24%、BODで約2割、NPは1割増加した。ディスポーザー排水による下水管内部への卵殻や貝殻、厨芥、土砂等の高さ約3cmの堆積も見られたが、堆積物は絶

えず流され、中身が入れ替わっているのではないかと推測され、閉塞に至るということはなかった。平成12～16年度でS字トラップの閉塞4件、屋内排水管の閉塞4件が報告されたが、いずれも70歳以上の高齢者によるもので、大量の厨芥を投入したり通水量が極端に少なかったりしたのが原因で、町で使用方法を説明したことで、その後はトラブルの発生はなかった。

次に、21世紀水倶楽部会員である荏原実業(株)企画・開発室長の廣本真治郎氏が「ディスポーザーを用いた資源循環型社会の提案」をテーマとして講演した。

この講演では、ディスポーザーおよび処理槽付きディスポーザーの設置の実態を踏まえ、導入によるメリット・デメリット、直投入型ディスポーザー排水が処理施設に及ぼす影響、ディスポーザー利用者のアンケート調査、製造メーカーと商品を紹介した。

さらに、それらの現状を踏まえた上で、直投入型ディスポーザーを資源循環型社会の道具の一つとして普及させていくための課題として、①流通経路が種々雑多、②認知度が低く、設置率が低い、③普及方法や行政・住民が一体となった管理手法の構築——を挙げ、健全に普及させるための組織が必要との提案を行った。

この後、参加者との意見交換が行われ、参加者からは直投入型ディスポーザー導入への賛否両論が繰り広げられたが、「ディスポーザーについて行政とメーカーがそろそろ真剣に議論する時期に来ているのではないだろうか」といった意見も提示された。

ディスポーザー導入の可否はともかく、このようなまとまったかたちでのディスポーザーに関する情報提供の機会は少なく、貴重な情報交換の場となったのは間違いない。